

水俣病を 知っていますか

高峰 武

はじめに	2
第一章 問題の始まり	—— 予兆はあったのだ.....	8
第二章 空白の時代	—— 生かされなかった研究成果.....	21
第三章 噴出するエネルギー	—— この国のあり方が問われた.....	28
第四章 水俣病とは何か	—— 事件の核心が現れる.....	40
第五章 水俣病は続いている	—— 未来への「財産」.....	53

はじめに

実子が生きる世界

まずは、水俣病の第一号患者・田中実子^{じつこ}について紹介したい。

一九五六年四月、田中実子と姉の静子^{しずこ}が水俣市のチツソ付属病院に入院する。医師たちがこれまで経験したことのない症状だった。同病院の院長・細川一^{はじめ}は五月一日、熊本県水俣保健所に、「原因不明の疾患が発生している」と報告する。水俣病の公式確認である。当時、実子は三歳の誕生日を目前にした二歳一カ月、静子五歳だった。

それから六〇年。人では言えは暦が一巡りして還暦となる長い日々。姉の静子は亡くなったが、実子は懸命に命を刻んでいる。この間、原因究明があり、裁判があり、チツソと国、熊本県の責任は確定したが、実子の暮らしが変わることはない。

二〇一五年の暮れ。水俣市^{みづま}月浦坪谷^{つらひら}の実子を訪ねた。

鉄道の線路を歩いて帰ったが、列車が来れば土手に身を寄せ、やり過ごしたという。そのころのことを綾子は「猫の子のように肩を寄せ合って暮らした」と語る。

やがて、熊本市の藤崎台にある熊本大学の病院に移る。昔、軍が使っていた病院で廊下のドアもないような古さ。身の回りの世話は家族の仕事だった。そこで静子が亡くなり、実子は水俣市立病院の水俣病棟に戻った。ここで付き添ったのは綾子だった。そのころの実子はやつと歩けるようになった。と言っても、黙って廊下を歩くだけだったが、楽しそうに感じて、その姿を見ているだけで、綾子はうれし



田中実子、父親の義光と母親のアサヤとともに、遺影は姉の静子(1976年、熊本日日新聞社)

実子は、長姉の下田綾子とその夫の良雄と暮らす。綾子は一九九五年の政府解決策の対象者で、良雄も一度棄却されたが、行政不服審査を申し立てて逆転認定となった。

窓のすぐ下は水俣湾の入り江である。父親の義光は腕のいい船大工だった。妻アサヤとともにその後、認定患者となる。

ある日、静子が茶わんを落とすようになった。義光が怒ってたたく。それでも茶わんは持てない。田中一家の水俣病の始まりだった。

当時、綾子は中学一年だった。間もなく、静子、実子の姉妹は、院長の細川から、経済的な配慮もあって水俣市の避病院(伝染病棟)への転院を勧められる。母親のアサヤは二人の世話で忙しく、義光と交代で病院に見舞いに行った。病院から帰る時には消毒をいっぱいかけられ、このためバスには乗れず、

かった。

一九六五年ごろ、水俣市湯の尻にできたりハビリセンターに入ったが、効果もなく自宅に帰った。それから一〇年ほど実子は落ち着いた生活が続いたが、義光が一九八七年に亡くなると、夜も眠らず、ご飯も食べなくなり、やせていったという。「勘は強いみたいです。悲しかったんでしょね」と綾子は実子を思いやる。

その綾子も二〇〇九年に倒れ、脳血管障害で今は車いすの生活だ。

病者が病者を介護しているのだが、こうした家族の状況は、水俣病被害者の一家では珍しいことではない。

実子はこの六〇年、言葉を発することはないが、綾子たちとの間では、心の交流は確かにある。声をかければ時折、笑顔を見せる。立ち上がったたり膝立ちしたりすることはあるが、ふいにぼたん倒れてしまうので、下田夫婦にとって気が休まる日はない。訪ねた日も頭部を守るヘッドギアを付け、畳の上をひっきりなしに動いていた。一〇畳ほどが実子が生きている世界の広さだ。今も魚が好きで、特にアサ



田中実子(2015年12月、熊本日日新聞社)

リが好物という。

身長は一四〇センチほど。体重は三〇キロ前後。二日間限りっぱなしで一日起きっぱなし、あるいはその逆の日々。今は二四時間ヘルパーの介助も受けているが、それでも肉親としての気掛かりに変わりはしない。

一九九二年に始まった水俣市主催の水俣病犠牲者慰霊式の会場は、実子が暮らす坪谷とは水俣湾を挟んだ向かい側の埋め立て地。式には毎年、環境大臣も熊本県知事も来るが、対岸で生きる実子のことには何人の人が思いをはせるだろうか。

一九七六年、公式確認から二〇年の水俣病の連載

ていたのが実子だった。「この子を忘れてはならない」。それが原田の強い思いだった。原田がそう繰り返したのは、忘れていく人が多いことの裏返しである。

実子の家を辞すと、対岸の天草の島々がくつきり見えた。水仙の白い花が入り江に揺れていた。少しずつ潮が満ちてくる。やがて実子の家の前もたつぷりとした海になることだろう。六〇年間、いやそれより前から変わることなくずっと続いてきた水俣の海の営みである。

水俣病は化学工場から海や川に排出されたメチル水銀化合物を、魚介類が直接エラや腸管から吸収、あるいはプランクトンなどの食物連鎖を通じて体内に蓄積、それを多食した人間の中で発生した中毒性の中樞神経疾患である。主な神経症状としては四肢末端優位の感覚障害(手足がしびれる)や求心性視野狭窄(視野全体が狭くなる)、運動失調、構音障害(うまく話せない)などがあるが、症状は多彩である。初期の熊本水俣病では発病後三カ月以内に一六例が死亡、六カ月以内に四例が死亡している。死亡率は一九六五年時点で四四・三%だった。メチル水銀化合

で、熊本日日新聞(五月一日付朝刊)は「童女のような二二歳」という見出しをつけて田中一家を紹介した。「静子はなあ、おとなしか器量よしにしゅうて思うて、実子は実のあるよかおなごにしゅうてそれぞれ名前をつけてやったとです」。記事にある母親アサヲの言葉だ。しかし、母親のささやかな願いは水俣病に奪われた。

水俣病患者らがその思いの丈をぶつけた一九七〇年のチツソ株主総会。白装束の巡礼姿で、ご詠歌を歌いながら会場入りしたが、ご詠歌を先導したのが義光だった。田中家は水俣病一次訴訟の原告である。

義光は証人として出廷したチツソの元水俣工場長・西田栄一への尋問でこう語りかけている。「あなたも、一度くらい私の家庭にきて、うちの子どもを見て、今後人間というものはこうして生きねばならないということ、よく勉強しなさい」

田中家の仏間に、七二歳で死んだ義光とやはり同じ年に六八歳で亡くなったアサヲの遺影があった。それに並んで、医師の原田正純(二〇一二年、七七歳で死去)の写真。水俣病と半世紀以上にわたって向き合った原田が「大切な人」として、いつも気遣っ

物の特徴は血液脳関門と血液胎盤関門を容易に通過することである。このため人の脳が障害を受け、胎児性水俣病の発生となった。

これから、実子が第一号患者となった水俣病の実像とは何かを考えていくが、水俣病は多面体である。向き合う角度で見える姿が違ってくる。ここでは、地元紙・熊本日日新聞の報道も紹介しながら、水俣病事件史をたどっていく。

水俣病を見る視点

また水俣病か。

こんな思いで、この本を手にとられた方も少なくないのではないか。

二〇一六年五月一日で公式確認から六〇年を迎える水俣病だが、あえて「水俣病を知っていますか」というタイトルにしたのは、どこまで私たちが水俣病についてその実像を知っているか、と思ったからだ。世界に例をみない健康破壊、環境破壊である水俣病だが、どんな歴史があったのか。今なお、多くの人たちが救済を求めているのはなぜか。こうしたことをどこまで私たちは知っているだろうか。

表1 公害健康被害補償法による認定者

	申請数	認定者数	棄却者数	未処分
熊本県	21,655	1,787	11,859	1,236
鹿児島県	9,272	493	3,739	792
新潟県・新潟市	2,573	704	1,382	160
国	495	33	360	22
合計	33,995	3,017	17,340	2,210

注：熊本県は2016年2月12日現在、鹿児島県は同年2月10日現在、新潟県・新潟市、国は同年1月末現在。

表2 1995年の政府解決策対象者

	一時金該当者数	保健手帳
熊本県	7,992	842
鹿児島県	2,361	345
新潟県	799	35
合計	11,152	1,222

注：保健手帳は療養費月額7500円。

表3 2009年の水俣病特別措置法による対象者

	申請者総数	一時金該当者数	療養費該当者数	救済対象外数
熊本県	42,757	19,306	3,510	5,144
鹿児島県	19,971	11,127	2,418	4,428
新潟県	2,002	1,811	85	77
合計	64,730	32,244	6,013	9,649

注：熊本県および鹿児島県は2014年8月29日現在、新潟県は2014年8月22日時点の暫定値。療養費は医療費の自己負担分。

まずは表1、表3を見ていただきたい。

「水俣病の被害者は何人ですか？」というこんな簡単な問い掛けにも、「それはですね」と言いながらこの三つの区別が必要になるといった具合だ。

説明すると、三つの救済制度のうち、①認定制度による対象者(表1)、②一九九五年の政府解決策の対象者(表2)、③二〇〇九年に成立した水俣病特別措置法による対象者(表3)である。①は公害健康被害補償法によって県知事から認定された水俣病患者であり、二〇一六年二月二日時点では二九八四人(熊本一七八七人、鹿児島四九三人、新潟七〇四人)。これに国の審査会で認定された三三人が加わり、全体で三〇一七人となる。②と③の対象者は水俣病とは認定されないが、水俣病に特徴的な症状を持つ人を対象にした制度である。表2が一時金二六〇万円を支給された一九九五年の政府解決策の対象者で、熊本七九九二人、鹿児島二三六一人、新潟七九九九人、合計一万一一五二人である。表3が二〇〇九年に成立した水俣病特措法による一時金二一〇万円などの支給を受けた対象者で、熊本一万九三〇六人、鹿児島一万一一二七人、新潟一八一一人、合計三万二二

四四人である。なぜ、こんな複雑なことになったのか。それは被害者側が望んだことではなく、もっぱら水俣病を引き起こした側がその時どきの事情で作りに上げた制度になっている。

水俣病という鏡を通して見ると、私たちの社会のさまざまな素顔が見える。きちんと総括しないと、教訓も生まれない。事件を生んだ構造に対する真摯な反省がなければ、悲劇は悲劇のまま終わる。

本書が水俣病を見る視点は二つある。一つは当時の物差し、その時にどうだったかである。そして、もう一つは今から見た時にどうだったかという、現在の物差しである。当時の物差しだけでは、「あの時は仕方なかった」で終わってしまうことが多いからだ。ここからは未来への教訓など生まれない。

本書の前半は時系列を追って、後半は問題点を絞るような形で見ていきたい。また、時代を象徴する人物の紹介も行う。(敬称略、肩書は当時)

第一章 問題の始まり——予兆はあったのだ

水俣病は自然界から始まった。それに人間が気付いた時、既に当の人間の病気も始まっていた。

「猫てんかんで全滅」

一九五四年八月一日付の熊本日日新聞朝刊にこんな見出しの記事がある。

「猫てんかんで全滅 水俣市茂道^{もぢ} ねずみの激増に悲鳴」

水俣病に関連した日本で初めての記事である。公式確認の二年前のことになる。当時、六ページしかなかった熊本日日新聞の三面の三段記事。

茂道は一二〇戸の漁村。六月初めごろから急に猫が狂い始め(地元では「ねこテンカン」と言っていた)、百余匹いた猫がほとんど全滅し、反対にねずみが急増、大威張りで荒らし回り、あわてた人々は各方面から猫をもらってきたが、これまた気が狂ったようにキリキリ舞いして死んでしまうので市に泣きつい

てきた……。

記事はおおよそこういうことを伝え、「この地区には水田がなく農薬の関係なども見られず、不思議がるやら気味悪がるやら」と加えている。

茂道はその後、水俣病患者多発地区となり、猫の被害を届けた漁師とその妻は水俣病と認定された。

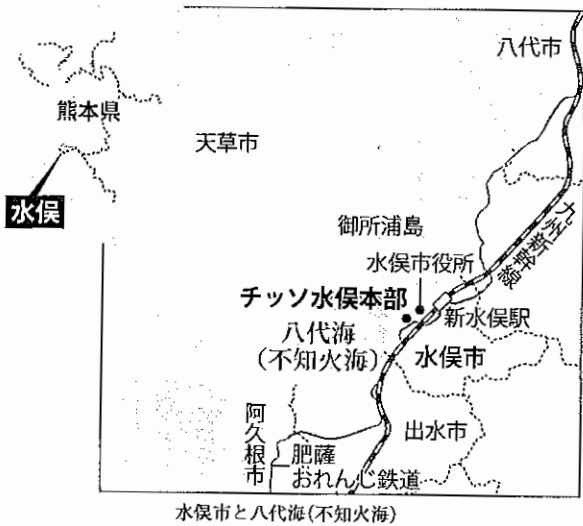
短い記事だが、よく読むと幾つものヒントがある。まずは、茂道が漁村ということだ。そこで猫が死んでしまう、もらってきた猫もまた死ぬ。ということ、猫に原因があるのではなく、その土地に問題がありそうだ。猫が食するものは何か。まず浮かぶのは魚介類だろう。水田もないので農薬もどうやら関係なさそうだ。今から振り返れば、被害の拡大防止に多くの示唆を与えているのだが、これ以降、記事はない。

この時期、八代海(不知火海)沿岸では鳥の落下や魚が浮くなどの自然界の異変が起きていた。何より、

人への被害も起きていたことが後で分かる。

チツソ水俣工場の歴史は、工場排水による汚染と漁業被害の歴史でもあった。漁民と工場との紛争は大正時代から始まっている。一九二六年(大正一五年)、それまで数年来チツソに補償を申し入れてきた水俣漁協は、困窮のため補償要求を取り下げ、代わりに永久に苦情を申し出ないという条件で、チツソから見舞金一五〇〇円を受け取っている。結局、その後も漁業権を放棄しては埋め立てを認め補償金をもらうことを繰り返す。

一九五二年、地元からの要望を受けて熊本県水産課係長の三好礼治が現地調査を行い、報告書で「排水に対しては必要によっては分析し成分を明確にしておくことが望ましい」と指摘した。この報告書には「工場排水処理状況」が添付され、そこには酢酸製造工程の原材料として「水銀」が明記されていたが、報告は埋もれてしまい、以降、報告書が原因究明や対策に生かされることはなかった。



水俣市と八代海(不知火海)

公式確認

一九五六年五月一日。「はじめに」で紹介したよ

うに水俣市月浦坪谷の田中姉妹の入院で「原因不明」の病気発生が公式に確認された。

一九五六年五月四日の日付で、水俣保健所長から熊本県衛生部長にあてた「水俣市字月浦附近に発生せる小児奇病について」と題する報告がある。

そこには田中静子の症状がこう書かれている。

「毎夜不眠となり泣き続け(中略)、症状は手及び足の強硬性また言語発音不明瞭であり、入院以来食餌をとらざるに依り鼻腔より栄養を摂取せしめあり」

県衛生部長への報告で特筆されるのは、タイトルにもあるように「小児奇病」となっていることだ。報告にも、田中姉妹の近所でも六歳の男児や七歳の女児、小学三年生に同様の症状があつたり、死亡していたことが分かった、とある。

田中実子の家は、家の窓から魚が釣れるような海辺にあつた。環境汚染によって真つ先に影響を受けるのは、自然と共に自然に依拠して暮らしている人たちである。そしてその中でも社会的弱者の子どもたち。水俣病は自然と共に暮らす弱者にまず現れたのである。しかも、それは食卓で起きていた。後に

時系列的に言えばこうなる。

五月二八日、水俣保健所、医師会、市立病院、チソ付属病院、水俣市衛生課の五者からなる「水俣市奇病対策委員会」が発足。実態調査を行うとともに開業医のカルテが再点検され、アルコール中毒や脳卒中などの診断名が付けられていた三〇人の患者を同様の症状と確認し、①発生が一九五三年までさかのぼることができること、②患者が漁村に集中していること、③一家に何人も発生していること、などが分かった。官民挙げての素早い対応であつた。

八月三日、熊本県は熊本大学医学部に原因の究明を依頼した。

一月三日、熊本大学医学部研究班の第一回研究報告会があり、伝染性疾患の疑いが消えて、重金属中毒が疑われ、人への侵入経路は魚介類、汚染原因としてチソ水俣工場の排水が注目されることになった。約半年で、化学物質に汚染された魚介類の摂取による発症、と絞り込んだことになる。

一九五六年末時点での確認された患者は五四人になり、うち一七人が死亡していた。死亡率の高さが際立っていた。

分かる有機水銀による水俣病の発生機序は、工場排水→海→プランクトン・エラなど→魚介類→人間という食物連鎖のサイクルとなるが、住民の立場からすれば、家族だんらんの食卓から悲惨な事件は始まったのである。

一九五六年という年は経済白書が「もはや戦後ではない」とうたつた年である。これは一般には「戦後が終わった」という前向きなニュアンスで語られることが多いが、経済成長にとって戦後復興という頼るべき材料がなくなったという逆の意味だった。その後の高度成長の実現が、もともとの意味を離れて明るいイメージをもたせたのかもしれない。

一橋大学の学生だった石原慎太郎が「太陽の季節」で芥川賞を受賞し、日本が国連に加盟するそんな時代に、東京から遠く離れた熊本、その熊本からも遠く離れた南端の海沿いの町で水俣病が確認されたのである。この時、ダイレクトに東京とつながっていたのはチソだった。

原因究明

原因不明の疾患の発生を受けて進められた対策は、初期対応の問題で指摘されることの一つが、差別偏見に関することだろう。

特定の地域で多数の患者が見つかったことから、まず伝染病の可能性が疑われ、消毒、殺虫剤散布が行われた。また生活に困窮する患者もいたことから公費で入院費を負担するために「疑似日本脳炎」という診断書で水俣市の伝染病舎に収容したケースもある。そのため、「水俣病」伝染病」というイメージは残り、それが患者家族に対する差別に形を変えて引き継がれていったという指摘である。

水俣病では、猫が重要な役割を果たしている。

冒頭で紹介した「猫てんかん」の猫もそうだが、人為的な猫実験もあつた。初めて成功したのは水俣保健所長の伊藤蓮雄だ。熊本大学医学部教授(病理学)の武内忠男から実験を依頼された伊藤は、保健所二階の所長室の隣室に七匹の猫を飼い、水俣湾の魚介類を与え続けた。最も早い猫は一週間で発症。遅い猫でも四〇日程度で発症した。また健康な猫を水俣市の茂道や湯堂(とうどう)といった漁村で飼ってもらおう試みもあつたが、これらもすべて発症した。

「食品衛生法」適用せず

国立公衆衛生院、熊本大学医学部研究班、水俣保健所長などが参加する厚生省の厚生科学研究班の第一回研究報告会が開かれたのは一九五七年一月。同年三月には、「熊本県水俣地方に発生した奇病について」を厚生省に提出する。報告書は、①水俣湾において漁獲された魚介類の摂取による中毒、②汚染しているのはある種の化学物質ないし金属類と推測、③今後の研究方針としては、疫学、病理学、毒物学的究明が重要で、チッソ水俣工場の十分な実態調査を行いたい、などとしていた。

水俣湾の魚介類を食べたことよって起きる中毒との疑いが強まったことから、熊本県は、水俣湾の漁獲禁止の検討を始めた。

参考にしたのが、静岡県浜名湖のアサリ貝中毒事件だった。浜名湖では一九四二年と四九年に死者が出る中毒が発生、貝類の採取・販売・移動を禁止した。一九五〇年にも患者一二人が出ると、静岡県は食品衛生法の条文を示し、浜名湖内の該当区域の貝類(カキ、アサリ)の販売を禁止していた。熊本県では、捕獲や摂食を禁じる知事告示を出す

方針を決めて一九五七年八月、厚生省に食品衛生法の適用の可否を照会した。この時の状況を当時、熊本県の公衆衛生課長をしていた守住憲明はこう証言する(一九八四年、水俣病三次訴訟第一陣)。

「こんな重篤な中毒事件が発生したのは世界で初めて、前例がない。食品衛生法の適用が一只の感覚だけでいいものか、将来のこともあるので、厚生省に可否を確かめて適用すべきだ、というのが副知事の意見だった」

一九五七年九月、厚生省公衆衛生局長から熊本県知事への回答は「水俣湾の魚介類のすべてが有毒化しているという明らかな証拠が認められないので、適用はできない」というものだった。

証拠を示すことは「不可能を強いるもの」というのが守住の受け止めだった。厚生省の言う通りにするには、水俣湾を締め切り、すべての魚介類をとって、すべてを猫に食べさせる実験が必要となる。それは不可能なことであった。

のちに、岡山大学大学院教授(疫学)の津田敏秀は、食中毒事件としてこの時点で魚介類の摂取をやめて被害調査をしていれば被害者は数百人にとどまった、

生産を止める一九六八年まで流され続けた。

有機水銀説

水俣病問題が大きな展開を見せるのは一九五九年に入ってからである。

同年七月、熊本大学の研究班は「水俣病の原因は水銀化合物、特に有機水銀であろうと考えるに至った」と正式発表する。

被害の拡大防止より、原因究明に論点が移ったような感がある中、原因物質としてセレン、マンガン、タリウムなどが挙げられた。チッソ工場内の残滓や排水口の泥土からこの三種の重金属が高濃度に検出されていたからだ、しかし、これらは単独では水俣病特有の症状を再現することはできなかった。こうした中、病理学教授・武内忠男、第一内科助教授・徳臣晴比古らが、それぞれ有機水銀に迫っていた。

きっかけは、一九四〇年にイギリスのハンター、ラッセル両医師が書いた論文である。農薬工場の労働者がメチル水銀蒸気を吸い込み、劇症の中毒となつた患者の症例報告だったが、そこでは、水俣で武内や徳臣らが直面していたのと同じ感覚障害、運動

と主張する。通常の食中毒では例えば「仕出し弁当を食べた」ということから対策が始まる。水俣湾で言えば「仕出し弁当」にあたるのが「魚介類」であった。通常の食中毒のように、「水俣病を水俣湾産の魚介類による集団食中毒事件」として見れば、漁獲禁止措置がとれたはずだという指摘だが、行政の動きはそうはならず、いわば、仕出し弁当の中の病原菌を探すことに焦点は移った。

なぜか。前例のなさ、休業補償の問題、折に触れて表面化するチッソへの配慮……。さまざまな背景が指摘されているが、漁獲禁止がなされなかつたという事実だけが重く残った。

一方でチッソは一九五八年九月、水俣湾につながる百間排水路から、北側に遠く離れた水俣川河口の「八幡プール」に排水路を変更、このことが新たな患者の発生を見ることになった。汚染の拡大である。排水の希釈を狙ったとされるが、この排水路変更は一九八八年に最高裁で有罪が確定した、チッソ元社長・吉岡喜一と元工場長・西田栄一の二人が業務上過失致死傷罪に問われた水俣病刑事裁判で大きな決め手となった。排水はチッソがアセトアルデヒドの

失調、視野狭窄などが報告されていた。また公衆衛生学教授・喜田村正次は水俣湾底土の水銀汚染が百間排水口泥土の二〇〇〇ppm(湿重量)以上を最高に、排水口から遠ざかるに従って低下するデータを示し、水銀はチツソから排出されたものとした。

有機水銀説によりやくたどりついた研究班だが、現時点で見れば反省点も残した。チツソの非協力的な態度の中、原因究明を進めたが、例えば工学部や理学部といった分野との組織的な協働体制はできなかった。アセトアルデヒド製造工程で水銀を使う反応は広く知られた反応で、工学系の研究者の参加があればもっと早く有機水銀に到達したのではという指摘もある。その後の訴訟などでは、早くから有機水銀の生成を報告する論文が出されていたことが明らかにした。一方で、研究班内部では医学部の各講座ごとに動物実験を競い合つて繰り返すというような事態も続いた。こうした点は今後、新たな疾患と直面した時の貴重な教訓ともなる。

「廃水停止は困る」

有機水銀説の発表で、チツソ水俣工場に向けられ

る「水俣」とでも呼ぶべきメンバーに入っていない人たち、それは漁民である。漁民を除いた「オール水俣」の人たちが、知事に対して工場の操業を続けてくれと陳情に行ったことには、少々言葉が強いが、少数を犠牲にして、あるいは少数の被害には目をつぶって多数が現在の暮らしをそのまま維持しようとする気持ちも表れているのではないか。そうした少数の犠牲の上に多数の暮らしが維持されるという構造は、今の私たちの暮らしの中にもあるのではないか。これが教訓の一つだ。

もう一つは、情報の隠蔽という問題である。後で触れるが、少なくとも裁判で確定した事実から言えば、一九五九年一〇月の時点で、チツソ村属病院長・細川一が行った猫四〇〇号の実験で水俣病同様の症状が起きているのだ。研究そのものは細川によればチツソ上層部の判断で中止になり、秘匿されたが、少なくとも一〇月の段階で工場の廃水を直接与えた猫が発病したことを知り得た人たちがいたことになる。こうした事実を知り得た人たちが、実験の結果を何らかの形で社会に伝えていけば、果たしてこの「オール水俣」の人たちがこういう行動をとつ

る目は一段と厳しくなった。

国会調査団が水俣入りし、熊本県知事・寺本広作が、水俣病の公式確認以来初めて水俣を訪れる。不知火海沿岸漁民は一月二日、総決起大会を開いて排水浄化装置完成までの操業停止などを求めたが、チツソが団体交渉を拒否したため、漁民が工場に乱入して警官隊と衝突、一〇〇人を超す負傷者を出す事態となった。他方で、知事にチツソ操業継続を求める動きもあった。これについて、一九五九年一月八日付の熊本日日新聞の記事を基に考えてみたい。記事は、水俣の人たちが県知事・寺本に陳情に行ったことを伝えるもので、見出しの通り、「水俣工場の廃水停止は困る」ということだった。陳情したのは、水俣市長、市議会議長、商工会議所会頭、地区労議会議長、二八団体の代表五〇人だ。記事によると、「陳情団の話では、市税総額一億八千余万円の半分以上を工場に依存し、また工場が一時的にしろ操業を中止すれば、五万市民は何らかの形でその影響を受けるといふ」とある。

ここには二つの教訓とすべき問題がある。

一つは多数と少数という問題だ。陳情した「オー

ただらうか。

人命が危険にさらされている状況の中で、肝心な情報をどうやって広く市民にオープンに伝えていくか、この記事に秘められたもう一つの教訓である。

チツソという会社

二〇一五年秋。水俣市古賀町にあるれんが造りの建物に多くの人の姿があった。熊本学園大学水俣学研究センターが行った見学会。建物は、一九〇八(明治四一)年に造られたチツソの旧工場。建物が立つあたりがチツソ発祥の地だ。その後、チツソから別の会社に転売されたが、今も当時の面影を残したまま使われている。現在の肥薩おれんじ鉄道水俣駅前のチツソ水俣本部(JNC水俣製造所)はこの建物の後、新工場として増設されたものである。

二〇一五年には水俣市内の土壌から土壌汚染対策法の基準値の一倍にあたる水銀が検出されるという出来事があった。原因は不明だが、付近では一九六〇年代にチツソが工場残滓を使って海岸を埋め立てた経緯があるという。こんなふうには水俣という街は、至る所にチツソの歴史が顔を出す。

チツソの創業者・野口^{しんがう}遊が鹿児島県大口市に曾木電気を設立したのは一九〇六年である。金沢生まれの野口は東京帝国大学電気工学科を卒業後、シームス東京支社に入社、その後、仙台でカーバイド生産に成功し、実業家としてのスタートを切った。

「東洋のナイアガラ」といわれた曾木の滝の豊富な水を使って電力を起し、近くの金鉱山などに供給した野口は一九〇八年、余剰電力を使って窒素肥料を作る日本窒素肥料株式会社をスタートさせる。当時の水俣村は工場敷地を安価で提供したり、電柱を寄付したり、積極的に誘致に動いた。以後、熊本県八代郡鏡町や宮崎県延岡市に現在の旭化成の前身となる工場を建設、さらには植民地下の朝鮮・興南に東洋一の電気化学コンビナートを作り上げ、興南工場の従業員は四万五〇〇〇人を数えた。

一九四五年の敗戦で海外資産をすべて失ったチツソは、政府の傾斜生産方式で重点とされた肥料の生産を再開し、朝鮮から引き揚げてきた幹部・技術者が水俣工場の指導層となった。一九五〇年に新日本窒素肥料株式会社と社名を変更した。

主力となったのはプラスチックの可塑性の原料な

どもあるアセトアルデヒドの生産。始まったのは一九三二年だが、戦後の高度成長の準備期に入ると、生産量は拡大、一九五五年には一万トン、一九六〇年には戦後のピークである四万五二四五トンに達し、国内の生産量の三分の一から四分の一を占めた。この工程が水俣病を生むことになる。

水俣の人口もチツソとともに急成長を遂げる。一八八九(明治二二年)の水俣村施行時は一万二〇四〇人、一九四九(昭和二四年)の水俣市制時が四万二二七〇人、人口のピークは一九五六年、久木野村と合併した五万〇四六一人である。二〇一〇(平成二二)年の国勢調査によれば二万六九七八人、ピーク時の半分ほどにまで減少している。チツソとともに発展した水俣市は、水俣病公式確認のころが最多の人口だったことになる。

チツソ株式会社という社名になったのは一九六五年だ。二〇一一年発刊の『風雪の百年』という社史で「水俣はチツソとともに、チツソは水俣とともに、苦楽を共にしてきた。それは宿命的な結び付きである」と書いているが、実はこれに似たような記述がある。

「お国自慢の日窒工場 煙はればれ希望の空にあげて伸びゆく商工都 肥薩境も津奈木の嶮も 越えて輝け水俣市」。これは一九四九年四月一日、水俣市制のスタートを記念して作られた「水俣小唄」の一節だ。水俣病の公式確認はこの七年後である。さらに一九六六年に市が発行した『水俣市史』には

「水俣に生まれ、水俣と不即不離の中でそだつてきた日窒は、町との間柄も一般工業都市には見られぬ血のつながりにも似た交情を深め、歩みをともししてきた」とある。こちらは水俣病が確認されて既に一〇年がたっている。チツソの百年史と水俣市史との、相似形とでも呼ぶべき思いの重なり合いは、水俣という地域とチツソという会社の歴史を浮き彫りにしている。

二〇一一年に事業会社JNCが設立され、親会社のチツソは事実上の清算会社となったが、現在の収益の柱は液晶、繊維・肥料、樹脂の三事業で、主力商品の液晶ではトップメーカーの位置を占めている。

見舞金契約という決着

熊本大学の有機水銀説に対して、チツソは単なる

推論と反論、東京工業大学教授の清浦雷作や日本化学工業協合理事の大島竹治らもそれぞれ否定の論陣を張った。会社、中央の学者、業界の三者一体となつての反論は、熊本大学の有機水銀説を「中和」する役割を果たすことになる。

一九五九年一月の漁民による工場への乱入などもあって、水俣病は全国ニュースとなったが、それは「治安問題」として扱われる側面が強かった。当時の熊本県警のトップに話を聞いた時、記憶に残っていたのは漁民の工場乱入の問題であり、水俣病患者をめぐる記憶は極めて薄かった。

一九五九年、三つの象徴的な出来事がある。どれも水俣病問題の幕引きを念頭に置いたものと言える。一つ目は、厚生省食品衛生調査会水俣食中毒特別部会の解散である。一九五九年一月一二日、同部会代表の熊本大学前学長・鰐淵健之が「水俣病の主因をなすものはある種の有機水銀」と答申した。翌日の閣議でこの答申が報告されると、通産大臣・池田勇人が、有機水銀が工場から流出したとの結論は早計だと反論、このため答申は閣議了解とはならなかった。そして部会は解散となった。当時の通産省

の雰囲気について同省から経済企画庁に出向し、対策の原案を練っていた人物のこんな証言がある。

「頑張り」と言われるんです。「抵抗しろ」と。(排水を)止めたほうがいいんじゃないですかね、なんて言うと、「何言ってるんだ。今、止めてみる。チツンが、これだけの産業が止まったら日本の高度成長はありえない。ストップなんてならんようにせい」と厳しくやられたものね(NHK取材班「戦後五〇年 その時日本は」第三巻)

この後、原因究明は経企庁が調整役を務める「水俣病総合調査研究連絡協議会」が進めることになるが、四回開かれただけで、立ち消えとなる。

二つ目は、水俣工場にサイクレーターという排水浄化装置ができたことだ。一月二四日の完工式では、当時の社長・吉岡喜一がコップにくんだ水を飲んでみせるというパフォーマンスもした。しかし、このサイクレーターはもともと水銀の除去を目的にしていなかった。後年、この事実を知った知事の寺本は「不明というほかない」と自らの手記に反省を記しているが、装置の完成によって工場排水が安全になったという社会的PR効果は大きかった。

会委員の全員一致とされるこのシステムが後に多くの複雑な問題を起こしていく。

この見舞金契約が裁判で「公序良俗違反」とされ無効となるのはこれから一四年も後のことになる。

■人・ひと① 細川一(チツン付属病院長)

一人の医師について触れたい。水俣病事件で極めて重要な役割を果たす医者である。

細川一。前記したように細川は水俣病の発見者であった。そして、猫四〇〇号実験で水俣病の原因が工場廃液にあることを突き止める医者となった。水俣病一次訴訟では、がんのため入院中の病院で裁判所の臨床尋問を受け、チツンの過失責任を認めた判決に至る決定的な証言を行うのである。

細川は一九〇一(明治三四)年に愛媛県に生まれた。東京帝国大学医学部卒。チツン創業者・野口遵の遠戚筋の紹介でチツンに入社。軍医などを経て、戦後、チツン付属病院長となった。

細川は「細川ノート」と呼ばれる詳細なメモのほか、雑誌に依頼されて書いた原稿を残しているが、そこには「会社病院」の医師としての悩みがこぼら

三つ目は、知事の寺本ら五人による「不知火海漁業紛争調停委員会」の、漁業補償と水俣病患者家庭互助会から出ていた補償要求に対する対応である。漁業関係では、三五〇〇万円の損失補償などの調停案を漁民が受け入れた。

水俣病患者家庭互助会には見舞金として死者三〇万円の弔慰金と二万円の葬祭料、生存患者は成年に年金一〇万円、未成年に同じく三万円を示した。孤立無縁の患者たちは暮れも押し詰まった一二月三日、水俣市役所で契約書に調印する。「見舞金契約」である。第四条には水俣病の原因がチツンの排水ではないと決まれば、見舞金は打ち切るとあり、第五条には、水俣病の原因が将来、工場排水に起因することが決定した場合においても新たな補償金の要求は一切行わない、とあった。細川の猫四〇〇号の実験から二カ月が過ぎていた。「魚はとっても売れん。働き手は倒れてしまった。食うためには一銭でも必要だった」。ある患者の述懐である。

見舞金契約で登場するのが、水俣病患者診査協議会だ。見舞金の対象者を選ぶ協議会は認定審査会となつて今に続いている。本人が申請し、決定は審査している。

「新しい病気を発見したという喜びと、大変な病気を発見してしまったという悲しみ、これは医師として、表現しにくい奇妙な感情ではあった(「今だからいう水俣病の真実」「文藝春秋」一九六八年二月号)

一九五六年五月一日の公式確認。実はこの二年前から細川の病院には今まで経験したことのない症状の患者が外来に来ていたが、細川らは「うつべき手もないまま」の状態だった。こんな細川だったから、田中静子、実子姉妹の入院は、「ただならぬ事態」が起きているという実感となったのである。

やがて医師としての細川の目は、自分の工場が水俣病の原因ではないかと思うようになる。一九五八年、チツンが工場排水の放流先を百間排水口から水俣川河口に変更した時、細川は反対する。「向こうで患者が出たら(犯人という)証明になる」からだ。工場が原因ではないかという細川の大きな疑念は、工場の廃水を直接、猫に与える猫実験となった。そして、発症した猫四〇〇号。以後、実験には会社からストップがかけられた。実験の再開は、見舞金契

約などで水俣病問題が社会の水面下に沈んだ一九六〇年八月以降になる。猫四〇〇号は九州大学に病理解剖を依頼したが、慎重な細川は一例だけの発症には不安があり、できれば複数のデータをそろえて確認したかったようである。積極的な発表にはならなかった。何より会社側の意向があった。しかも、裁判の証言によれば、これ以降、問題の廃水採取できなくなったという。

病床にあった細川を尋問した弁護士坂東克彦は『細川先生の臨床尋問』と題する小冊子の中で、細川のこんな言葉を書き残している。話が新潟で起きた水俣病に及んだ時、「水俣病患者のなかには患者でない者がまじって入ることがあるかもしれない。しかし、肝心なのは、入るべき者がぬけてしまつてはならないことである。あまりに正確さを求めることには意味がない」。自身が経験した熊本水俣病の反省にたつての言葉だろう。

「人形の家」で知られるヘンリック・イブセンの戯曲に「民衆の敵」がある。トマス・ストックマンは医者。彼が住む温泉町に病人が発生し、ストックマンは工場地帯から引かれた飲み水が原因と突き止

める。彼は公表しようとするが、兄である町長からストップがかかる。改修工事に金がかかるし、観光への打撃も大きいというのだ。町民集会が開かれ、ストックマンは「多数の民衆が正しいのではなく、真理そのものが正しいのだ」と言うが、町民からは「民衆の敵」と指弾される。迫害を受けた自分の子どもたちに向かって、ストックマンは言う。「お父さんは本当のことを言ったために一人になったんだ」。「民衆の敵」は、細川の愛読書だった。

細川は、水俣市の眼科医の谷川家をよく訪れた。谷川家には四兄弟がおり、長男の健一は民俗学者で、次男の巖（ベンネム）は後に詩人として知られるが、「民衆の敵」は雁の紹介だったともいう。

細川のノートにこんな言葉がある。「現象や症状を調べるだけではないけない。これらは事後の救済には役に立つが、十分な公害防止策には役に立たない。公害においては救済よりも、防止の方がはるかに重要な仕事である」

細川は臨床尋問での証言から三カ月後の一九七〇年一〇月に亡くなった。死を前にしての振り絞るような証言だった。享年六九。

第二章 空白の時代——生かされなかった研究成果

一九五九年に起きた厚生省食品衛生調査会水俣食中毒特別部会の解散、漁業補償、チソ水俣工場のサイクレター完成、見舞金契約という流れを見ると、ここには「水俣病問題を終わらせる」というある種の「意思」が感じられる。事実、水俣病問題は一九六〇年から深く水面下に沈んだ。一九六三年三月の『神経研究の進歩』に、熊本大学医学部第一内科助教授の徳臣晴比古らは「水俣病の疫学」と題した論文で、「水俣病も昭和三六年以来、新患者の発生をみず、漸く終息した様である」と書いた。

一九六四年の東京オリンピックに日本中が湧いた時、水俣病問題は最も深い淵にあった。そしてその空白は、一九六五年の「第二の水俣病」と言われる新潟水俣病の確認まで続く。しかしこの時期は、実は幾つかの真相究明のチャンスがあったのに、これを生かされなかった時期でもあり、放置されたことで被害が広がった時期でもあった。

毛髪水銀調査

熊本県衛生研究所が不知火海沿岸住民一〇〇〇人を対象に一九六〇年から三年間行った調査がある。中心になったのは、熊本大学薬学部教授から同研究所へ移った松島義一であった。

毛髪水銀濃度の測定は、水俣病を契機に日本で広く使われ、その有用性が認められた検査法だ。カナダなどでは血中濃度の水銀を測ったデータはあったが、毛髪の測定データはなかった。

松島が一九七一年に書いた供述書によると、熊本大学医学部教授（公衆衛生学）の喜田村正次の毛髪水銀調査を参考にして、大規模調査を計画したが、資金不足もあって千代田生命保険の公募研究に応募して費用を捻出したという。

調査には驚くべき数字が並んでいる。水俣市の対岸にある天草の御所浦では、平均値で九二〇ppm、